華東海域における霊魂観の研究
—舟山列島の葬送儀礼を事例として

徐　歆然

はじめに

舟山は中国四大仏教名山のうち唯一の海上聖地であり、「海天佛国」と呼ばれる普陀山があるため、住民の間では仏教の勢力が強いが、道教も信仰されている。舟山列島の葬送儀礼の特性を考察すると、死者儀礼全般は、民間の伝統的慣習の上に成り立った儒教的一面をもち、道教も加えた相互の影響の下で、仏教独自のものとはいえない。舟山の葬送儀礼は、地域によって、年代によって微妙に異なるが、簡単にいってしまうと、儒教的原理に仏教的要素や道教的要素を組み込んだもののように思えた。儒教では、死者になると、それを悼んでいろいろな儀式を行なう。死後すぐに遺体を葬るわけではない。死から葬るまでその間、遺体を家に安置しておくが、このことを殯という。今日の葬式において、通夜をしたり告別式がすむまで棺を安置しているのは、儒教における殯の残影である。葬儀参列者は、故人の写真を仰ぎ、棺に向かって跪いて拝み、故人を思い、泣き、何回も焼香する。これらは、仏教ではなく儒教のマナーである。

1.　舟山地域の一般的な葬儀

1956年４月27日の中央工作会議のなかで、毛沢東は、従来の土葬を改革し火葬に変え、封建的な風俗を取り除くことを奨励した。広い国土をもつ中国だが、墓地がつくられる耕地(農地)などは限られており、すべての人を土葬にしていると土地が足らなくなってしまうからである。文化大革命時の混乱を経た後(実質は90年代に入ってから)、舟山本島では土葬が全面的に禁止になった(部分離島を除く)。伝統的な葬送儀礼についても、厳しく管理するようになったという。かつて見られた一族の宗廟、祠堂、祖廟の建造と回復も禁止されている。全市統計によると、1996年は火葬が44%、土葬は56%になった。2005年には、火葬は88%、土葬は12%になり、九年の間に土葬は44%減った。しかし、「入土為安」(故郷の土と化すことが心の安らかさをもたらす)の思い、骨となってでも土に還るという伝統思想が重視されてきている。死者儀礼の過程、葬送儀式も大きく変わっていない。仏教が盛んな舟山では、仏教の信者の葬儀は僧侶に関るが、通常は葬儀中の宗教的な儀礼もすべて葬式屋が行なう。葬式屋とはいっても、会社組織があるわけではない。個人営業のネットワークのようなものがあり、連絡をとりあって役割を分担して葬儀を行うようである。舟山地域で一般的葬送手順は次の通りである。①臨終。②報訃音（死の通知）。③長明灯　焼荐包。④守霊。⑤落斂。⑥喪服。⑦出棺。⑧葬列。⑨火葬の儀礼。⑩死後祭。

①臨終

臨終を迎えると、子女は親孝行のために、最後を看取りに行く。天寿を尽くして死ぬという(壽終正寝)ことを重視して病勢が危急なら素早くお風呂に入らせ、あるいは湯で絞ったガーゼで体を拭き清める(息を引き取る前に、体を清めないままあの世に行くことは祖先への不敬だと考えられている)。

古礼では、「壽衣」を着せる前に「沐浴」が行なわれる。舟山地方志によれば、「沐浴」は「買水淨身」と呼ばれる。「買水」とは、「沐浴」に用いる水に関する風習の一つで、「孝子」(死者の息子)が川や井戸など水辺へ行き、遺体を清めるための水を汲む行為である。「孝子」は川や井戸の神に拝礼し、香を焚き、硬貨や紙銭を水に投げ入れ、紙銭を焼

く。このような一連の行為の後、持参した桶や碗に水を汲み、それを家に持ち帰って、遺体の清めに用いる。「買水」は「孝子」自らが死者の清め、或いは祓いのために水を汲みに行く儀式であり、父母への孝養を象徴的に示す機会となる。現代の舟山には遺体を洗うための「買水」儀式がなくなったようになる。

沐浴してから事前に用意しておいた衣服を着替えさせてあげる。これを「穿壽衣」という。臨終後に「壽衣」を着せると死者はそれをあの世に着ていくことができないと考えられる。「壽衣」には、上着、ズボンのほか、靴、靴下、帽子が含まれる。上着、ズボンの枚数は家によって異なるが、奇数枚の所が多い。60歳以上になると長寿を願い、自分自身、或いは息子が棺と共に準備することがある。また、冥界は寒冷な所であると考えられているため、夏でも冬でも綿入れの衣服を用意する。これは古来、臨終後に行われるのが規範であったが、舟山地方志の記述によると、臨終前に行なわれる場合が多い。

冥界に行くと苦難に遭わないように、呼吸が切れそうになると粥の汁を口にいれて食べさせる。これを「吃一様飯」と言う。家族たちが見守る中、あの世に旅たち、死が確認されたら、吉時を風水師に選んでもらい、戸板の上に死体を載せて正庁（家の中心になる部屋）へ移す。その際、寝具は軽いものを選択し、敷布団一枚、掛け布団もなるべく軽い、薄手のものにする。死者の前に、供物で死者を祭ることがある。これを「移屍羹飯」と言う。一般的に供え終わると、供物を捨てることにする。葬礼で行なわれる様々な儀式のうち、遺体を清め、死装束を着せる儀式を取り上げる。朱熹『家禮』喪禮の当該箇所を引用する。

執事者設幃及牀、遷尸、掘坎。陳襲衣、沐浴、飯含之具。乃沐浴、襲、徙尸牀置堂中間。（儀式を行なう人は帷と寝台を設け、遺体を遷し、穴を掘る。死者に着せる衣、「沐浴」、「飯含」の道具を並べる。そうして沐浴させ、衣服を着せ、遺体を寝台にうつし、正室の中心に置く。）

② 報訃音（死の通知）

死者の遺族が人を派遣し、訃報と葬儀の日取りを直ちに親友に通知することを「報訃音」と呼ぶ。訃報者は雨傘を逆さに持ち、親族の家に着いたら雨傘も依然として逆さに置かれる。傘は「孝子」が「報喪」（親族に死を知らせる）に行く際に用いられる。父母の在世中は、大きな傘のような父母に護られているが、亡くなるとその庇護を受けることができず、訃報を知らせに行く「孝子」は晴雨にかかわらず傘を持って行くとされる。訃報と報告した後、お茶を飲み、遠隔地から来る場合は一食のご飯を食べる。訃報を聞いた親友は、ほかの親友に互いに訃報と報告しあう。泣く人がいなくなると、瓦を割り、訃報を終わらせる。訃報者が離れた後で、邪気を追い払うため、使った茶碗を割り、箸を捨てる。親族関係の遠近により、深紅の布団、線香、蝋燭、果物などの供物を用意し、弔問へ向かう。

③ 長明灯　焼荐包

正庁へ死者を移した後に、死者の足のところに灯明を点す。これを長明灯という。出棺まで燃え続け、迷える死者を黄泉に導くためである。そして、死者が生前に使った掛け布団と敷き布団などの寝具を、一定の方向にむけて三叉路で焼き払う。これを「焼荐包」と言う。人が亡くなったら、寝具を一緒に携えるという意味である。

④　守霊

遺族や近親者、親友が集まり、死者のそばに付き添うことを守霊と言う。「通夜」或いは「陪屍」とも言う。守霊中に蝋燭や線香が燃え続き、死者の親戚者に限定された儀礼で、死者と添い寝をして一晩過ごす。霊堂には家族や友人からもらった死者を弔うための送る絹織の掛け物、哀悼用の聯句、花輪などを並べる。壁が足りない場合、縄や竹竿などを用意し、聯句を掛けるようにする。棺は縦に置き、戸板の上に寝かせられた故人の顔を白い布で被せ、頭を東のほうに向ける。棺の前の霊壇には死者の遺影が飾られる。葬式がご遺族を慰めたり、故人にお礼やサヨナラを伝える意味が主なのに対して、大切な習慣である。

⑤　落斂

棺に死体を移すことを「入木」或いは「落斂」と呼ぶ。落斂時間を風水師に選んでもらうが、一般的に満潮時間を選ぶことになる。死者の霊魂が間に合うように船に乗らせ、順調にあの世に到着することを意味する。死体の上に陀羅尼被という布団をかけていた。陀羅尼被というのは、陀羅尼経を書写してある布団である。仏が、迷い苦しんでいる霊魂を救い、あの世に導く役目があったように思われる。入棺前の死者を前に弔問に来る親戚は、声を上げて泣かねばならない。土葬の場合には、死者にこの世と同じような生活をあの世でも生活できるような様々な用品を棺の中に入れてやる。例えば、衣服、家具、高級車、さらには別荘なども紙で模型を作って入れる。これらを作る専門店もあり、最近は携帯電話や電化製品などは必需になってきている。特に大事な物はあの世で通用する金「紙銭」である。種類は「人民元」のほか、「ドル」「ユーロ」まで用意されており、あの世で快適な生活が過ごせるように考えられている。死者を棺に収める時にはその泣き声が頂点に達する。この後蓋をして釘を打ち付けるので、これが一緒に暮らした人を身近に見る最後となる。くぎ打ち時、身内は棺を取り囲み、「〇〇病気が治ったか」と作業員が質問し、「よくなった」と喪主が答え、死者の生前の病気を聞き終わるまで一問一答の形式で行う。都市では火葬が普及しているが、いずれも墓前で紙製の銭、家や車、財物などを燃やして死者に贈り、弔う習慣がある。

⑥　喪服

中国伝統葬礼では親族関係により五服と言われる白い喪服がある。死者との関係で五段階に分けられる喪服と服喪の習性は、葬礼の伝統である。斬衰（ざんさい）、斉衰（しさい）、大功（たいこう）、小功（しょうこう）、緦麻（しま）と呼ばれる五服は麻で作られる。どの親族のためにどの種類の喪服を着用させ、どのぐらいの期間喪に服するかは『儀礼』喪服篇に詳細に記されている。この喪服の礼は、現代の舟山地域の葬儀にも残っているが、古礼とやや変化したところもみられる。現在では、死者の身内は手首と首に細い麻の紐を結び、みな白の短靴をはき、全身は白い喪服を着る。息子は斬衰の喪服を着て、白い帽子をかぶり、帽子の上に「三梁冠」（藁縄）をかける。同世代の身内は斉衰を着て、孫は白い帽子をかぶり、帽子の上に「二梁冠」をかける。娘は白い喪服を着て、「孝斗」をかぶる。近親は、白い喪服を着て、ほかの親戚は白い帽子をかぶり、喪章をつける。以外の人、みな普段着のまま参列する。喪章は胸につける場合には、黒い花型にして、腕に巻く場合は左腕に黒い腕章とする。尚兼和によって、中国社会の喪服の変革については「中華民国の始めに服装の改革を行った際にも、喪服だけは昔のままにして、現代式になったものは少ない。」と論じている。

⑦　出棺

葬儀に際し、棺を屋敷から庭へ出すこと、または墓地に出発することを出棺という。土葬の場合、出棺日に棺を正庁から運び出し、庭で置いておき、棺の上に酒をかけながら、祝詞を奏上する。これを「醮杠」或いは「祭棺」と言う。その時、泣き声は全て止る。一般的には、祝詞の内容は死者への弔辞或いは死者の生前の人柄をほめたたえる言葉である。儀礼が終わると、棺を材棺(運ぶ龕、棺をおさめた葬具)に入れ、材棺の前後に四人ずつで担いで墓地に行く。材棺は赤と黄色など多彩な色で綺麗に飾っている。上は鶴、両脇に龍、下の両面には八仙の絵を描いている。神々の守りで死者の霊を無事にあの世に送ることを意味する。経済状態によって、棺を材棺に入れない場合もあり、前後に二人ずつで棺を担ぐのである。火葬が普及している現在でも、故人の服を棺の中に敷いて、骨灰盒（骨箱）を入れ、棺を材棺に入れて出棺することもある。庭を出てすぐ街の中で、葬式屋さんが位牌、遺影、骨箱、供物を供えている仮の机を用意し、息子たちが長次の順で机に酒をつける。これを上路祭と言う。墓穴では、まず爆竹が鳴らされる（墓穴に潜む邪鬼を追い払うためだが、葬儀の過程で、しばしば爆竹が用いられる）。爆竹の灰を取り除いたあと、埋葬用の布団が敷かれ、その上に骨箱を入れた棺が置かれた。

⑧ 葬列

銅鑼を鳴らすのを合図に葬列の進行が始まる。魔除け、鬼祓いの働きがある。葬送行列の先頭は、亡霊を導く役割を果たす「引魂幡」であり、儀礼全体を通じて使用される。引魂幡の後方、銀箔で作った銀錠(紙銭)を撒き散らす人がいる。銀錠を撒くのは、土地神に通過許可をもらい、孤魂野鬼に邪魔されないように、順調に亡霊を送ることを意味する。次に、簡単に僧侶の服装をしたニフォババ(念仏者)と呼ばれる７人の在家者が、木魚と銅鈴を叩きながら「阿弥陀仏」と念仏も唱える。経済状態によって、和尚を頼んで読経してもらう場合もある。後ろに、泣き喪棒を持つ孫である。泣き喪棒のあとに遺影がつづく。遺影をささげもつのは喪主(通常は故人の長男)である。つぎに、故人の二人の息子が魂轎(輿)を担いで出てくる(墓地からの帰りに、長女次女の夫が代わって魂轎を担いで帰る)。魂轎の中に「伏為顕考○(姓)公○○(名)之霊位」（結婚した女性の場合には、「伏為顕妣○(夫の姓)門○(本人の姓)氏之霊位」）と書かれた位牌を置いておく。魂轎の後ろに、棺が庭の中から出てくる。故人の子女が棺を取り囲んで泣いて続く。棺につづいて、五、六人の楽隊である。棺が門を出て墓地に着くと奏楽を行うが、もちろんこれも会葬者を楽しませるためではなく、死者を弔慰するためである。そのあとには、花輪、花かごを持つ近親者、参列者がつづく。火葬の場合には、長男が骨箱を持ち、長女或いは長男の嫁が長男に黒い傘をさし、孫が遺影を持つことになる。

⑨ 火葬の儀礼

舟山の都市部では火葬が主流となっていて、環境に配慮した段ボール製棺が奨励されている。霊柩車が火葬場に着くと、係員が棺を霊堂に安置する。ニフォババを頼む場合は、読経をしてもらう。読経の間に家族、参列者は焼香し故人を送る。告別式が終わると、遺体を火葬炉に入れる。遺骨は火葬場の方により骨箱に収められて、遺族に引き渡される。埋葬から火葬への変化であり、死んでから焼かれるのが嫌だという心情的な抵抗がありつつも、火葬後に残される白骨に対する穢れの観念が薄れ、葬式が終わっても遺骨を自宅に置くようになった。伝統的な葬法との関連を考えてみると、土葬であった舟山では、遺体に対する告別が重要であって、それは火葬に移行しても変わってない。

喪主が遺骨を持ち、車で来た道を喪家に引き返す。遺骨を霊堂に置き、もう一度告別

礼、喪礼を行う。礼を終わると、遺骨を出棺日まで一旦霊堂に安置しておく。火葬してから、すぐ遺骨を墓地に運ぶ場合もある。死者の親族は墓穴の前に立ち、骨灰盒を墓穴に納め、衣類、老眼鏡など故人生前の好物を副葬品として入れる。蓋をし、親族は花輪や果物を供える。これを祭墳という。墓碑正面には死者の名前と建てた人の名前、墓を立てた年月日が彫られている。舟山地域の墓制は基本的に男系を中心に「双穴」夫婦の合葬である。葬列が墓地から喪家に帰り、門前に置いておく通夜の時使った焼き藁を跨ぐ。魔除けの目的であると言われる。

⑩　供養

葬儀の後も、いくつかの供養を営む。死者の遺体は墓地へ埋葬されるが、死者の霊魂のための儀礼は、継続して行う必要がある。死者がなくなった日から数えて7日目に初七日の供養を行い、それから一週間目ごとの供養を行う。人間は生前の行いに対して「地獄の十王」と呼ばれる十人の王様の前で次々に裁判に掛けられると『十王経』に書いてある。特に初七日は除災得幸（じょさいとっこう）と言って、ご遺族の災いを取り除き、幸福を与えるために祈る七七日に次いで大切な儀式である。霊魂が死後35日から49日の間に次の世に通じる六本の道路の内の一本を選ぶ最も大切な宗教的儀式の日である。死後の世界で裁判が行われ、最終的に49日目に来世に行く場所が決定されると言われているからである。身内は慎みの生活をして7日ごとの初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日と言われるように四十九日まで週忌を続ける。大事なのは五七日である。五七日に、故人の家族が集まって法要を行う。身内はこの間に結んだ白い麻紐と唱えた経を燃やし、履いている白い靴を脱ぐことができることになる。霊魂があの世へ行く道中で孤魂野鬼に邪魔されないようにという配慮から、孤魂野鬼の供養も行われる。七七日の次、百か日があり、一周年忌、二周年忌、三周年忌まで進んでいる。因習によって3年後に喪が明ける。その後、毎年の死者の生辰、命日ごとに「忌日羹飯」（先祖に食事を食べさせる）を行う。

葬礼は、人が一生を終え、家族、親族、友人、知人によって行なわれる儀式であり、臨終を看取り、遺体の処置をし、納棺し、棺を安置し、告別の式を執り行った後、墓地に埋葬するまでの一連の儀礼をいう。社会においては、伝統的に葬礼を通過することによって、人は社会の一員から離脱すると見なされ、残された子孫にとっては孝養を表わす絶好の機会と考えられていた。葬礼は、中華人民共和国成立前後から簡素化が提唱され、伝統的な儀式の多くが失われつつあるようである。しかし葬儀の中で行なわれる様々な儀式は、その伝承過程において、さまざまな地域的、時代的バリエーションが生み出されたと考えられる。また、葬礼は、それぞれの家の社会的、経済的事情により、儀式の行われ方が異なる。

2.　島人の「潮魂」儀礼

2.1　島人の霊魂観

舟山は東シナ海に臨み、太平洋に面し、揚子江出口の南側の浙江省北東部に位置し、全1391個の島嶼（そのうち人が住んでいるのは103個）からなり、古くから「海中洲」と呼ばれる。

島人は人々には魂があり、死んでも魂は帰って来ると考えている。人の肉体は魂に支配され、人が死ぬのは、魂が肉体を離れたためだと言われている。人が死後、不滅の霊魂を

慰めなければ、あの世で安定させない、或いは夜にこの世で遊離することになる。子供が急に病気になったり、頭痛がしたりするのは、自分が衝撃を受け驚愕したときに霊魂が肉体から抜け出してしまうからだと考えられている。

除災の仕方はいろいろだが、基本的には手で耳を提げながら、小声で「魂よ、早く肉体に戻りなさい」と唱える。魂がまだ呼び戻されない場合、夜に竈神に水を供え、線香を焚き拝む。つぎに、火で溶された錫を先に供えた水の中に入れ、錫の固まる形状によって衝撃を受けた原因、或いは魂の落ちた現場を占い、「何日生まれ何歳になる何という人の魂が早く本人の体に戻りなさいよ」という。不明の病気にかかったとき、一つ或いは二つの魂魄が肉体から抜け出したからだと言われる。すべての魂魄が肉体から抜け出すと、人は死ぬことになると考えられる。

海難事故で死体を拾い上げない遭難者の葬式は普通の亡くなった人と異なり、特殊な葬式を行う。海で死んで郷里に帰ることができない霊魂は、「推潮鬼」になると言われている。死者の魂を慰めるために、引き潮の時、身内の者が道士を頼み、海辺で死者の魂を呼び戻して藁人形に乗り移らせる。この儀式は、「潮魂葬」と呼ばれる。「潮魂」は2種類に分かれ、1つ目は「追魂」、2つ目は「招魂」である。

死体が遭難五七日以内に見つかったとしても、死者の魂はまだ海上で漂うと信じられている。家族が魂を呼び戻すという簡単な「追魂」儀式が行われれば、死者の霊魂が潮の流れにしたがって家に帰ることができると言われている。夜間、引き潮のとき、遭難者の身内が線香と蝋燭を持ち、銅鑼を叩き鳴らし海辺へ行く。これを「敲冷鑼」と呼ぶ。遭難者の妻は海辺を歩きながら、「某（死者の名）よ、海は寒いので家に帰りましょう」と呼ぶ。遭難者の子女は、後ろについて「帰って来ます」と答える。そうしないとその死者の魂が海に残って家に帰られないからだという。

遭難7日以内に死体が見つからない時には、死者の魂を呼び戻し、藁人形に乗り移らせる儀式を行う。このような儀式は「追魂」儀式より一層厳かで、悲惨である。

2.2　家の斎醮儀式

「潮魂」儀式は、一般的に出棺前日の夕方に行われる。三日前、先に家の門のところに「忌門卓」を設けておく。その「忌門卓」の上には、三杯の茶、三碗の飯、六杯の酒、五品の精進料理、一枚の肉などを並べ、三本の線香を焚き、二本の赤蝋燭をつけ、「青龍吉慶」を書いた符に香炉で押しをする。死者の魂を家に入れさせるため、道士は死者の罪悪を懺悔する懺悔文を、死者に替わって道士が唱え、門神(悪鬼・悪霊などを屋敷内に入れないための門番的神)の許可を求める。諸地方の龍王、神々に儀礼開始を告げ知らせなければならない。こいう儀式が二日間行われる。

三日目、死者の家の正庁に斎醮儀礼を行う。三脚の八仙卓が「品」のような形で設けられる。これを「衆神卓」と言う。「衆神卓」の前に、「画卓」という長卓を置く。「衆神卓」の上には、六杯の茶、六碗の飯、十二杯の酒、十二品の菓子果物が並び、塩・砂糖・醤油等を用いる。中央の手前に三基の燭台、三基の香炉がすえられる。亡霊を守り送ってくれるため、諸神霊にごちそうすると言われる。「画卓」の上には、赤色の木製「招魂符」が精米に立てられる。「招魂符」の表に「神符」、裏に「雷令符」が刻まれる。斎醮を行うとき、道士が「招魂符」を叩き、号令を発し、冥界の将軍吏兵を招請する。

「招魂」儀式には「三堂轿」を行う。「三堂轿」は「吊堂轿」(藁人形が海辺に立てられる)、「坐堂轿」(藁人形を正庁の椅子に座らせる)、「睡堂轿」(藁人形を戸板に寝かせる)の三つに分けられる。藁人形とは、藁を束ねたり、編んだりして死者の形を模した人形である。藁人形が死体の身代わりとして用いられる。最近、地方によって藁人形の代わりに綿製の人形も使わられている。身内の者が、藁人形に死者の服を着せ、頭部に死者の遺影を貼る。人形を正庁の一番奥に置いておいた戸板に寝かせれば、足のところに「脚後灯」(長明灯)を灯し、顔を白い布でかぶせる。藁人形からすこし離れて、「霊位卓」を置く。亡霊を寂しく感じさせないため、精進料理のほかに、特に一対の茶碗、一組の杯、二膳の箸を供えている。鬼の力を借りて死者の三魂七魄を探してもらうため、庭内で果物やごちそうを並べ、三本の線香と一対の白い蝋燭を焚き、孤魂野鬼に食を施す。

「招魂」儀式の開始前には、道士たちは沐浴斎戒し、葷腥(生臭物)を近づけず(葷腥の穢気がみなぎると神霊が降臨しないことに恐れがある)、心を清め、敬虔な感情を抱く。心に誠がなければ神は霊験を示さないと考えられている。神を楽しませ、神を祭るから、その雰囲気は実に悲壮で厳粛である。道士は、胸背に八卦太極の辟邪の模様の道袍を着て、頭に冠巾をかぶり、足に雲履と称する下履きを履き、手に鐘・磬・鈸・鈴・鼓などの法器を持ち、威厳を持ち荘重に見せかける。各々の法器は各々の用途がある。鈸を打ち鳴らして妖怪を駆逐し、神仙を呼び出せるのである。鈴を振り鳴らして亡霊の済度ができる。鼓は邪気を駆り避け、神に通じる作用が賦与される。「魂木」は横長の四角い木片、儀式に際して卓上に置き、号令を発し命令を施行することに用いられる。道士が「魂木」で卓を叩いて悪霊を威嚇し、斎場を静める。笏は細長い板片で、臣下が奏上のときに持つから手版とも称し、朝覲に因んで朝版ともいう。道士が両手を合わせて胸の高さに恭しく持ち、威儀を整える。

道士が浄心呪、浄口呪、浄身呪を唱えてから、「三請三招」と「三献文」二通の祭文を誦読し、天地水三官に対して福を賜り、罪を赦し、厄を払うことを祈願する。誦読の間に、身内の者が「衆神卓」に酒を三回つけ、酒をつけるごとに、道士たちは一斉に法器を打ち鳴らす。祭文を唱え終わると、道士が「檄文」を念じ始める。「檄文」には道士の親筆による黄色の紙上に神に対して願うことと書かれている。書くとき、道士が必ず潔斎し身体を清浄し、道士自身の神気を練ってから筆を取り、筆を通じて神気を紙上に注ぎ走らせねばならない。「檄文」の末尾に「雷霆都司」と刻されている印璽が押されているのである。印璽というものは、中国古代にあっては権力の象徴でもあった。印璽を失うことは権力を失うことに等しかった。「檄文」は官府文書をまねして、印璽が押されれば、雷神は号令を発し命令を施行するための根拠とし、雷霆都司の威力を感じさせ、人間の願いを神仙に伝えて感通させるような効果がもたらされる。「檄文」が読み上げられてから焼かれ、願いはその煙とともに天庭に送り届ける。天官に福を賜与してくれることを祈願するという意味がある。

2.4 海辺の招魂儀式

正庁の斎醮儀式の終了後、道士たちが海辺に「潮魂儀式」を行いに行く。道士の後ろには、喪服をつけた家族が手に一本線香を持って並んでいる。道士が持っているのは、死者の姓名・死亡年月日・享年が書いてあり、分散した魂魄が招かれる招魂幡であり、儀式全体を通じて使用される。道士の後ろについた家族の一人が、1羽の雄鶏を抱えている。雄鶏

が神通力を持ち、亡霊を導く役割を果たすと言われている。

亡霊の心を温めるために海辺でいくつかの藁の束を焼く。こうすると、遊離している霊魂がこの火を目印に、自分の終着点に迷わず帰ることができると考えられている。引き潮のとき、道士たちが手に持った法器を一斉に打ち鳴らし、一名の道士が片手で招魂幡を持ち、片手で招魂鈴を振り鳴らして呪文を唱え始める。身内の者が炬火をかざして「某（死者の名）よ、海は寒いので家に帰りましょう」と歩きながら呼ぶ。後ろの子女が「帰って来ます」と答える。引き潮になるまでこういう一問一答の儀式を何回も繰り返す。引き潮になると、招魂鈴の音がますます大きくなり、一発の巨大な音がすると、海の亡霊が藁人形に呼び戻されると意味する。

海辺の招魂儀式をおわると、道士たちと家族が来た道を引き返す。帰る途中で、家族は死者の名前を呼び続ける。家に着いたら、雄鶏を「衆神卓」の上に置いて米を食べさせる。次に、道士は「牒文」を宣読し、死者の三魂七魄が藁人形に入ることを諸神に告げ知らせる。宣読後、「牒文」を藁人形の前に焚化する。悲壮で煩瑣な潮魂儀式がここで終わることになる。

夜に家族が藁人形のそばに付き添う。この「守霊」という儀式が一般的の葬式と同じである。翌日、霊魂を船に乗らせるために、引き潮を見計り、藁人形を棺に入れて普通に出棺し、山で埋葬し、その儀式も一般人の葬式と同じである。火葬が行われた地域に、藁人形を段ボール製の棺に入れ、霊柩車に乗せて火葬場に行く。藁人形も火葬炉に入れて焚化し、藁を燃やして残った灰が遺骨として骨箱に収められる。出棺日に、骨箱が墓地に埋葬される。

2.5　「潮魂」の現状

葬送儀礼は風土や生活に密着し、また、その中から生まれたものである。海に囲まれた舟山列島では、海辺の暮らしが特色であり、その暮らしと結びついた葬送儀礼に伝統的なものが見出される。「潮魂」は特殊な地域で形成された葬儀文化であり、海に囲まれた海域環境と密接な関係がある。「嵊山箱子乗、十口棺材九口草」の民謡に、昔の葬送実態が反映されている。『定海県志』にも「客死海去、無骨可帰、以狸衣冠多」と記されている。2008年、「潮魂」が舟山市非物質文化に登録された。

「潮魂」葬儀は、道教的な影響を受けている。道教はもともと秘教的な性格をもっており、儀礼の施行にあたっても、その重要な部分は文字に記されることなく、師匠から弟子へ秘伝として伝えられる。島の道士は、主に海難事故の遭難者の葬式を執り行う。家族代々受け継がれることを主として、風土とともに発展してきた。「文化大革命」の時代に過激な宗教批判で「潮魂」が一時に禁止されたが、徹底的な破壊弾圧に遭わず80年代ごろ以降、また盛んに行われる。近年、造船技術の進歩や漁撈法の発達改善で、危険率が減少になった。しかし、海難事故が発生し遭難者の死体も見つからない場合もある。「潮魂」という慣習は、各漁村に広がっている。それぞれの漁村の「潮魂」儀式は少しずつ異なる。最も代表的な漁村は嵊山島と岱山島である。

3.　舟山の肚里仙と道士

儒教の発生はシャマニズムにある。死者の魂降ろしである。しかも魂降ろしだけではなくて、

魄も呼び戻す。そして神主に依り憑かせ、この世に死者を再生させる。招魂再生である。招魂再生をして本当に再生することを、だれも事実として客観的に一般的に証明することはできない。死者の魂・魄が現世に帰り、この世に再生するという考え方であり、観念であり、信仰なのである。招魂再生の生も輪廻転生の生も、同じく信仰としての生である。もちろん自然環境習慣も異なるから、各地域、各民族においてシャマニズムの表現方法はそれぞれ異なる。しかし、超自然界や超自然的な存在(霊、神霊、精霊、死霊など) に接することができるとする点は共通する。

舟山には神や霊魂と人間とを媒介するとされるシャーマンがいる。舟山では、通鬼神の霊力を持っているという霊媒を肚里仙(トリシー)と呼ぶ。肚里仙は、その口を通して霊の言葉を語り、あるいは自動的に文字などを書記し、普通の人には見えない霊を見ることができる者とみなされ、島人の関心を集めた。

死者の霊魂を呼び出し、みずからに乗り移らせ、死者自身となって親族と直接語り合う口寄せのことを「通信」と言う。肚里仙が、神を招き寄せ、自身に憑かせて、まず依頼者に死者の名前と墓の場所を聞く。墓の場所を分かると、神が一時肚里仙から離れて、死者を探しに行く。しばらくすると、神が再び肚里仙に憑かせる。これは神が死者を肚里仙のそばに連れて来ることを意味する。死者の身の上が確認されると、神はもう一度肚里仙から離れ、死者の霊魂は肚里仙に憑いて依頼者との間で問答が交わされる。肚里仙の口を通じて死者がこの世に思いを語り、あの世での近況を家族に伝える。家族は祖先に会ったかいなかを聞いたり、冥界で必要としている物を聞く。遺族にとっては、死者のためにすべき社会的な義務という意味をおびる場合もあるが、死者に直接語りかけ、罪責感や悲嘆の情を直接表現することによって、喪失感や抑鬱状態から回復するための場でもある。

肚里仙は家族の不幸や病気の原因、未来の吉凶、禍福について神の通知を求める島人の依頼に応じて口寄せも行なってきた。「通信」と同じく、肚里仙が神を呼び寄せ、自身に憑かせて、依頼者に家の住所と求めを聞く。つぎに、神は肚里仙から一時離れて、依頼者の家の竈神を訪ねる。竈神は、各家の厨房に祭られる家庭の主神であり、一家の禍福吉凶を司る神として信仰される。竈神はその家の禍福状況を神に伝える。

道士と肚里仙はどのような関係にあるのだろうか。筆者の観察では道士自身が死霊や廟の神に憑依されるということは、全くなかった。現代の舟山における道士は、主に海難事故の遭難者、交通事故で死んだ人の招魂儀式を執り行う。交通事故で死んだ場合には、病院から死体を家屋へ運んできて、事故現場で死者の魂を家に呼び戻してから、普通の葬式と同じように守霊し納棺し埋葬する。家で自殺した時には、死者の魂が家にいると言われるため、招魂せず家の正庁に寝かせて守霊し正式の墓に葬る。他郷で死んだ人の霊魂を客死鬼ととらえる。他郷で不幸な死を遂げた霊魂は必ず故郷に連れてこなくてはならない。死体が他郷から故郷へ運んでこられない場合には、他郷で火葬し、遺骨を身内によって家に持ってくる。帰りの途中で、「某(死者の名)よ、 家に帰りましょう」と呼び続ける。死者の魂が潮とともに故郷へ導かれると思われ、経済状況によって道士を頼んで海辺の招魂儀式を行うことがある。舟山の道士は、出家して道観の中で他の道士たちと日々道教の修行に明け暮れて生活しているのではなくて、すべて在家生活を送り、主として死後の招魂儀礼を人々に施すことをその生業としている。道士が招かれてくるのは、招魂のとき以外比較的まれである。道士たちが民間宗教者の 肚里仙と競争する場面がなく、両者が密接な関係では繋がってないようである。

4. 身体と地を重視する舟山

古代中国では人間の死生に関して、人間は魂と魄の二つの霊魂があると考えた。加藤常賢はその著『漢字の起原』に、「云と鬼とに従う。魂は雲気となって浮遊する」、「白は頭顱の形で髑髏。精気を失って白骨と化したものを魄という」と解説している。魄は息絶えたあと終焉へ向かい、肉体が朽ち、さらに白骨も大地に化してしまう。魂は人の死後天に昇り、魄は地に留まるというもの。人が死んだ後行われた招魂儀式、それは天上向けて魂を肉体に復すのである。また『淮南子』精神訓篇が、「精神(つまり魂)は天の有なり.....精神は其(つまり天)の門に入る」と述べているから、魂ははじめ天上のどこかにあり、この世に顕現するときに肉体を伴うと考えていたらしい。そしてやがてそれが肉体から永久に離れて、再び天上へ帰ると考えていたのではないかと思われる。現在でも、死ぬと魂は天上に昇り、魄は死体とともに墓に入るという信仰が支配的である。通常祖先の霊魂は天上に上昇している。地にある祖先の墓には祖先霊魂の魄が住んでいる。このような中国の霊魂観からうかがわれるのは、地と身体の重視である。

舟山では魄は肉体に止まるという観念が古くから存在し、魂と魄の両者に関心が強く、土地と身体を重視する傾向があった。魂は身体から離れるが、その魄が戻ってくる場所として故郷と身体があり、もし故郷と身体がよく制御されておらず、魂の戻る場所が失われると、死者の霊魂があの世に遊離し彷徨することになると考えられている。

儒教では、その肉体は死とともに脱けでた霊魂が再び戻ってきて、より憑く可能性を持つものとされる。死者の肉体は焼くべきではなく、そのまま地中に葬り、墓を作る。儒教的立場からすれば、死者の肉体は、悲しく泣くべき対象であり、遺族がきちんと管理すべき対象なのである。仏教は火葬にする。死者の肉体には仏教的意味が認められないからである。骨を納めた墓も、本来は仏教と関係がないはずである。

5. 祖先祭祀

仏教では、四十九日の間に次に生まれ変わる場所が定まる。そこで、すこしでも良いところに生まれ変わることができるよう、僧侶を通じて供養する。それは初七日に始まり七日ごとに行われ、やがて四十九日の当日、その人の生前の行為の善し悪し、即ち因果応報によって生まれ変わる先が決まる。最高界は天上界で、神に生まれる。その次は人間界であって、人間として生まれ変わる。こういうふうに天界から地獄までの六つの世界のどこか生まれ変わる。この生まれ変わるということは、実は再び苦しみが始まることなのである。転じて生まれ、そこにおいて生・病・老・死の苦しみを再び繰り返すということである。このような苦しみの循環を輪廻再生という。加地伸行も、仏教の輪廻再生からいえば、祖先の霊はどこにも存在しないし、祖先祭祀をする必要もないし、墓や祖先祭祀の出発点となる葬儀の必要もないはずである。

儒教の死生観から生まれてきている祖先崇拝に基づく祖先祭祀が中国に普遍的であるので、仏教は儒教を取り入れる必要があった。祖先祭祀導入の具体化とは、(1)神主を建て、招魂するシャマニズムを認めること、(2)墓を造り、形魄を拝むことを認めること、儒教式葬礼を取り入れた葬儀を行うこと等である。中国人の心に最初にアピールしたのが儒教のシャマニズムであったが、魂・魄が神主という板に依りついて再生する招魂再生は、実際は観念上のものであるが、その永遠性というのも、祖先祭祀あってのことである。死者の魂・魄をその命日の日に招き寄せるとき、より憑くべき場所が必要である。そのために儒教は神主を作った。こうし

て憑りついた魂・魄は、その儀式が終わると、神主から離れて元の場所に帰る。残った神主は宗廟へ、あるいは祠堂や住居内の祠壇へ移し、安置する。これが儒教の祖先祭祀の大筋である。仏教の先祖供養は、六道の内の悪いコース(畜生・餓鬼・地獄)に墜ちた先祖を救うためのものである。それを具体化するには位牌を建てて、命日やお盆のときに、その位牌に先祖の魂を憑り付かせるというわけである。

舟山では、七七日の次、百か日があり、清明節、七月半、冬至、一周年忌、二周年忌、 三周年忌まで進んでいる。その後、毎年の死者の生辰、命日ごとに家族が死者を家に呼び寄せて食事するように祈願する。死後百歳祭になると、僧侶、念仏者を通じて供養する。経済状態によって、普段に死者を供養してもらうこともある。子孫によって篤く弔われた死者の霊魂は祖先に昇格し子孫を守り、子孫の弔いが継続することが望まれる。

舟山列島の普陀山は、観音菩薩が住む神聖な島として特別な信仰をあつめている。島人の家庭内に仏堂を安置されることが多い。仏堂の中央に一般的に観音菩薩を納め、供物、お茶、線香を供えている。位牌を安置した建物は宗廟であるが、近世では祠堂という。しかし、火葬を施行して以来、宗廟、祠堂、祖廟の建造と回復も禁止された。室内に祠壇を作って位牌の安置場所として遺影とともに納め、あるいは普段は単に壁掛け箱の中に納めている。墓地から帰って紙位牌を焼却し壁掛け箱の筒に納めたり、木製の位牌(寺院で納める位牌は下部に仏教蓮華の 彫刻が施された)に移したり寺院の牌位堂に納める例もある。

おわりに

海に囲まれた舟山列島では、海辺の暮らしが特色であり、その暮らしと結びついた霊魂観・葬送儀礼に伝統的、歴史的な伝承の特性が見いだされる。古代では舟山人が呉越の東南部に居住し、祖先の魂は不滅で土に埋葬すれば安心させ、供養していない魂に対して招魂儀礼を行うという呉越文化の歴史伝統を踏襲した。特に舟山独特な地域で形成された固有の葬儀文化「潮魂」が海域環境、古来文化と密接な関係がある。歴史の変遷から見れば、舟山で形成された風習に最も影響を及ぼしたのは、明清時代に行われた海禁政策のため、明洪武二(1369)年と清順治八(1652)年の島の人口大移動である。かなりの数の島人が寧波、台州等の内陸に移り住んだ。数百年後、舟山へ帰省の時、自ずと寧波、台州などの浙江省東部風習が齎されたことになった。北宋(960ー1127年)の時代に、寧波地方では儒学が定着するとともに仏教の隆盛と世俗化が進み、また道教の影響などもあり、儒教・仏教・道教の「三教」が人びとの死生観や葬送儀礼に大きな影響を与えた。そのような「三教」の影響は、今でも濃厚にみられる。

参考文献一覧

加藤常賢　1979年　漢字の起原　角川書店
加地伸行　1990年　儒教とは何か　中央公論社
加地伸行　1994年　沈黙の宗教―儒教　筑摩書房
木村英一, 酒井忠夫, 福井康順　1983　道教　平河出版社
諏訪春雄 等　2009年　東アジアの死者の行方と葬儀　勉誠出版
新谷尚紀, 関沢まゆみ　2005年　民俗小事典死と葬送　吉川弘文館
福井文雅, 坂出祥伸　1994年　道教事典　平河出版社
山本恭子　2008年　華中における葬礼:"穿壽衣"、"買水"、"淨面"をめぐって
金沢大学中国語学中国文学教室紀要, 11
金濤　1986年12月(4)　舟山漁民風俗考[J]. 浙江民俗
李広志　2007年(12)　現代寧波地域における葬送儀礼の研究　岩大語文
浙江民俗学会編　1986年　浙江風俗簡志　浙江人民出版社